スペインとポルトガルの左翼政党
—危機の中での再生？—

武藤　祥
関西学院大学法学部教授

はじめに—イベリア両国の左翼政党から見えてくるもの

2010年代以降のヨーロッパの政治を考える際、いわゆるポピュリズム（政党）が鍵となることは周知のとおりである（水島 2016）。その多くが右派的・排外的な言説や政策を掲げる一方、急進左派との親和性もある左派ポピュリズム政党も現れている。ギリシアのシリザ、スペインのポデモスがその代表格である（野上 2015、中島 2016など）。

この両国が、2008年にヨーロッパを襲った金融危機によって深刻な打撃を受けたことを改めて想起されたい。移民・難民問題が右派ポピュリズム伸張の源泉の一つであるならば、左派ポピュリズムのそれは、紛れもなく金融危機とその後各国で採用された緊縮政策であった。

政策的選択肢が狭まる中、既存の中道左派（社会民主主義）政党は、緊縮政策に対する代替案を提示できないばかりか、時には「緊縮政策の実行役」とさえなった。中道左派政党は労働者階級の擁護者、福祉国家の維持・推進役という役割を果たせなくなり、中道右派政党との違いも曖昧になった（Príncipe 2019: 74）。

こうした状況の下、左翼政党はいかなる役割を担っている（担いうる）のか。本稿ではこうした問題関心に基づいて、これまでの比較研究（March 2012, Chiocchetti 2017など）であまり取り上げられてこなかったスペインとポルトガルの左翼政党の歴史と現状を紹介したい。

むとう　しょう
東京大学大学院法学政治学研究科博士課程単位取得退学。博士（法学）。専門分野は、スペイン・ポルトガル政治史、比較政治。立教大学法学部助教、東海大学政治経済学部准教授などを経て、現職。
著書に『「戦時」から「成長」へ—1950年代のフランコ体制における政治的変容』（2014年、立教大学出版会）、『ヨーロッパの政治経済・入門』（共著、2012年、有斐閣）、『スペインの歴史を知るための50章』（共著、2016年、明石書店）など。

歴史的背景

本特集号は冷戦終結後を主たる対象とするが、両国の左翼政党を考える際は民主化期にまでさかのぼる必要がある。以下、主に共産党に焦点を当てて概観しよう。

スペインはフランコ、ポルトガルはサラザール/カエターノによる独裁政権の下、左翼政党は非合法化され厳しく弾圧された。同時に、特に共産党系勢力は反独裁運動の中核を担ったことで高い威信を得た[1]。

だが1974-75年に独裁政権が終焉し、民主化が進む中、両国の共産党は厳しい状況に直面する。スペイン共産党（PCE）はカリーリョの下で穏健路線（王制の受容、ユーロコミュニズムへの転換など）を採用したが、1979年にマルクス主義を放

棄し、いち早く現実路線へ舵を切った社会労働党(PSOE)との競合に敗れた。

ポルトガルでは独裁後の一時期、軍主導で社会主義的政策が試みられ、ポルトガル共産党(PCP)もこれに関与した。同党はその後も急進的な立場を示し、国政選挙において常に15-20%の得票を維持したものの、政権に参画することはなかった。結果的に両党とも、民主化後の政治においては周縁的な位置にとどまったといえる。

スペインではゴンサレス率いるPSOEが1982年に政権を獲得するが、高いインフレ率などを背景に、ヨーロッパの社会主義政党の中で最初に、ネオリベラル的な構造改革（賃金抑制、労働市場の規制緩和など）を断行した。この政策は失業率の増加をもたらし、当然ながら労働組合などからの反発を招いた。本来であれば、右転換したPSOEに反発した労働者の支持の受け皿となるべきであったPCEは、政治路線やカリーリョの指導方法をめぐる内部対立によって、その役割を十分に果たせなかった。

こうした状況が変化するのが、スペインのNATO加盟問題である。当初加盟に反対していたPSOEだが、政権獲得後加盟容認に転ずる。これに対しPCEは、平和主義運動、フェミニズム組織、人権団体などを糾合し、反NATOのキャンペーンを展開した。1986年3月に実施された国民投票では、53%の賛成により加盟が承認されたが、このキャンペーンから同年に生まれたのが統一左派(IU)である。IUは当初、カリーリョ離党後のPCEを中心とする選挙連合として発足したが、後に組織政党へと転じる(Ramiro 2000)。こうして、（特殊な要因によるとはいえ）共産党のイメージを払拭したIUは支持を拡大させ、1996年にその勢力はピークに達した(得票率10.54%、21議席)。

他方PCPは、マルクス主義に立脚する革命政党としてのアイデンティティを堅持し、1990年5月の臨時党大会においてもこの路線の維持が決定された（Hudson 2012: 72）。PCEと異なり選挙で恒常的な支持を得ていたこと、そして比較的党内の同質性が高かったことが、同党の刷新を遅らせたとも考えられる。PCPは緑の党（PEV）（後述）と選挙連合「民主統一連合（CDU）」を組むものの、1990年代以降、得票・獲得議席数は漸減していった。

対照的な形で冷戦終結を迎えた両国の共産党だが、1990年代後半には共に後退が顕著になる。スペインでは1996年にアスナール率いる中道右派・国民党（PP）政権が成立した。IU指導部はPSOEと連携することで同政権への対峙を図るが、自党主導でPSOEを左傾化させるという戦術は功を奏さず、2000年総選挙において両党は共に惨敗を喫した（Ibid: 67-69）。一方ポルトガルでは1998年の国民投票において中絶法改正（容認）案が否決され、改正を訴えた左派の退潮が強く印象付けられた。

金融危機と左翼政党

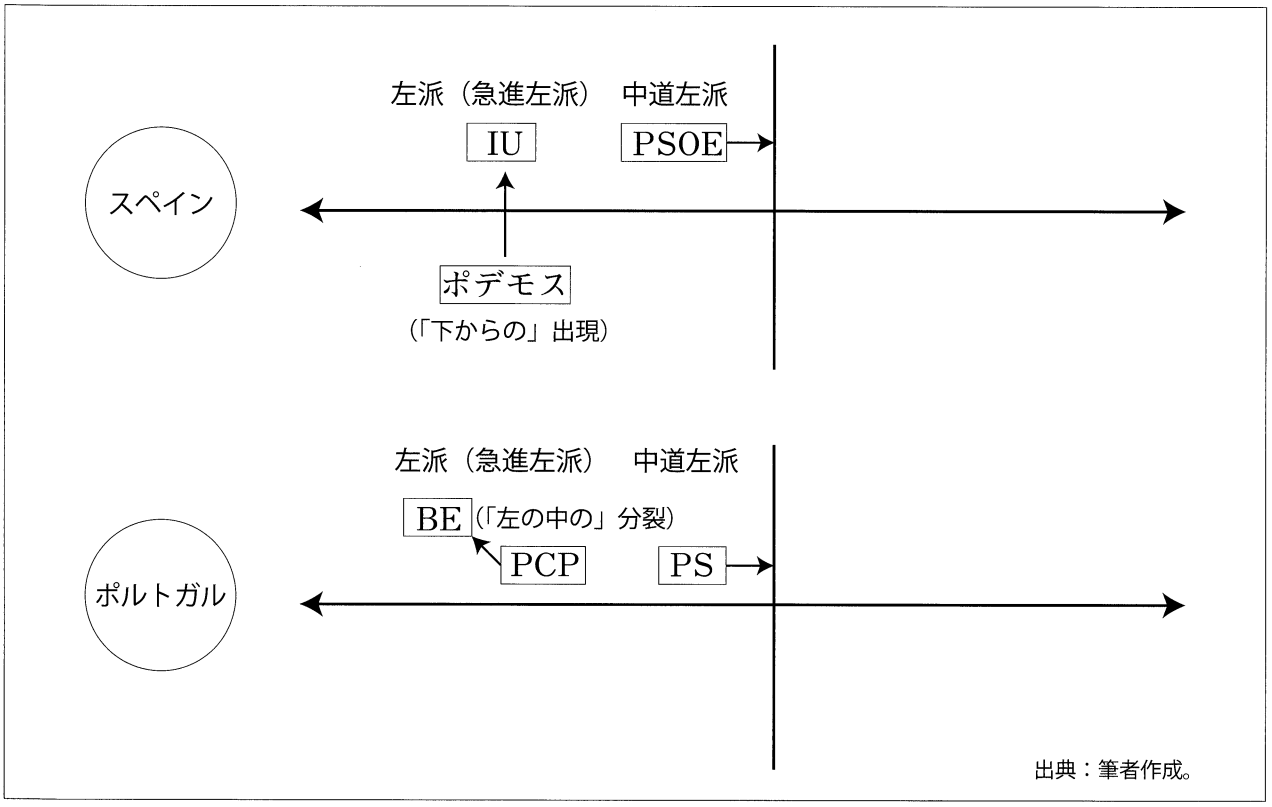
アスナール政権は、同時期の西欧のトレンドであった「第三の道」とは大きく異なる新自由主義的政策を推進したものの、好調な経済などを背景に、左翼政党が明確な代替案を提示できる余地は少なかった。ポルトガルでも2002年に中道左派・社会党(PS)から中道右派・社会民主党(PSD)への政権交代があったものの、中道政治への収斂の中、左翼政党は埋没の危機にあった。

そうした状況が一変したのが2008年の世界金融危機であった。深刻な打撃を受けた南欧諸国においては、いわゆる「トロイカ（欧州委員会、ECB、IMF）」が主導した緊縮政策の是非をめぐり、政治の対立軸（時には政党システムも）が再編成された（Freire and Lisi 2016）。

金融危機は、未曽有の水準の失業率（特に若年層や女性）や、社会保障の削減・公的セクターの縮小による生活水準の低下、貧困率の上昇などをもたらした。それは福祉国家の完成によって消滅したはずの生活防衛という死活的問題が再登場しただけではなく、さらにEUと各国政府の関係、民主的代表性のあり方など、ヨーロッパ統合が進む中で懸念されてきた本質的な問題が尖鋭な形で噴出した契機ともなった。

金融危機当時、スペインではサパテロ率いる

【図1】金融危機後のスペイン・ポルトガルにおける左の政治空間



出典：筆者作成。

PSOEが、ポルトガルではソクラテス率いるPSが政権の座にあった。ソクラテス政権は緊縮案を議会に否決されたことで2011年3月に退陣するが、両国とも中道左派政党は対内的な応答性より対外的なそれを優先させ（Freire 2016: 174）、労働者（より広義には社会的・経済的弱者）の防波堤にはならなかった。中道左派政党が労働者の不利益になる政策をとったのは1980年代のスペインにも見られた現象だが、金融危機のインパクトは、左の空白を埋める政治勢力に対する需要をより大きく高めたといえる。

これを埋めるべく登場したのが、スペインのポデモスと、ポルトガルの左派ブロック（BE）であった。もっともポデモスは政治システムのアウトサイダーであったのに対し、BEは既存の政党システムの枠内から生まれたという興味深い差異もある【図1】。この点を踏まえつつ、両党の歩みを見よう。

ポデモスはもともと、2011年5月に起こった「15-M運動」を起源とする。これはアメリカの「オキュパイ運動」から着想を得たもので、失業者や若者など、金融危機と緊縮政策の影響を大きく受けた層（「怒れる者たち（indignados）」）が中心となった、自然発生的な抗議運動である。指導者イグレシアスのテレビ出演、SNS、さらに街頭での直接行動などを駆使し、人々の間に急速に広がったが、当初この運動において議会への進出は二義的な位置づけであった。こうした姿勢は2011年総選挙における（特にPSOE支持者の）棄権率の上昇につながり、結果的にPPの勝利をもたらしたとされる（Medina 2016: 244）。

ポデモスの政策・理念は明確に左派的であるが、その言説は「エリート（カースト）」と「普通の人々（人民）」[2]という、ポピュリズムに特徴的な図式を前面に押し出したものである（Ramiro and Gomez 2017）。こうした特徴から、当初伝統的な左派アクター（IUや労組）はポデモスに対し懐疑的・敵対的な姿勢を見せたものの、後に共闘関係を結ぶに至った。これにより、中道左派に対する急進左派、既存政党（あるいは政治システム全体）へのアンチテーゼとしての新興政党という2つの意味において、ポデモスが新たな受け皿となる道が開かれた。初の選挙となった2014年5月の欧州議会選挙

において、ポデモスは7.9%の得票(5議席)を獲得し、翌年5月の地方選挙でも大きく躍進した（マドリードとバルセロナではポデモスと市民グループが支持する市長が誕生した)。

だが、このように華々しい船出を飾ったポデモスは、反既成政党・反エリートという主張がもたらす2つの困難に直面する。

第1に、新興政党に宿命的につきまとう「抵抗」と「統治」のジレンマである。これは反緊縮という文脈では、中道左派政党の右転換に不満を持つ旧来の支持層と、政治システム全体に不満を持つ有権者双方に対し、いかにアピールするかという課題にもなる（Castaño 2019: 30)。ポデモスは、2015年12月の総選挙において第3党に躍進するが、その後PSOEとの連立協議が不調に終わったことで、いわゆる「ハング・パーラメント」の状況が発生した。ポデモスはその元凶とみなされた可能性があり、事実この頃からポデモスに対する支持率は頭打ちとなった。

第2に、他の新興政党との競合である。ポデモスとほぼ同時期に、反既成政党・反政治腐敗を掲げ、かつより現実的・中道的な政策を示した市民党が登場したことにより、「上か下か」という政治図式において、「下」の中での競合が発生したのである[3]。

以上の困難を克服するために、ポデモスは言説・政策両面においてより穏健化していく（Llaguno 2019: 166)。それは既存政党との関係にも表れた。2016年6月の総選挙を前に、ポデモスはIUと協定を結び、統一ポデモス(UP)（※本稿ではこれ以降もポデモスと表記)として選挙に参加した。

一方BEは、1999年にPCPからの離党者を中心に創設された。BEはネオリベラリズムだけでなく、PCPの中央集権的指導への反対から生まれたという意味で、既存の政治空間内における刷新を目指した政党といえよう。またその組織構造も、母体となった3つの組織の自律性・バランスを重視するなど、旧来的な性質を有している。BEは結党以来得票を漸増させ、2009年総選挙においてはPCPを上回るが、2011年総選挙では再び逆転を許す（Freire 2016: 175)。BEとPCPが左の空間でゼロサム的な競合関係にある中、BEが依然として高い動員力を有するPCPに取って代わるのは容易ではない(Hudson 2012: 73-74)。

以上、共産党と左派ポピュリズム政党について見たが、ヨーロッパ全体において重要なアクターとなりつつある環境政党についても、両国の現状を概観しよう。

スペインでは、環境運動自体は1980年代から存在したが、環境保護を掲げた単一争点型の政党は、少なくとも有意な存在としては現れていない[4]。古くはIU、現在はポデモスや同党から分離した「マス・パイス」などが環境保護政策を取り入れている[5]が、このことと環境政党の不在との関連はより詳細に検証する必要がある。

対照的にポルトガルでは、緑の党(PEV)が早くも1982年に創設された。同党は1987年以降PCPと選挙連合を組み、2019年までの全ての国政選挙で2議席を獲得している。2003年5月に採択された同党の綱領においては、リベラルモデルの下での大量生産・大量消費への代替案として、持続可能な成長を目指すとされている（同党HP)。もっとも、PCPとの関係からも推察されるが、こうした主張は環境保護よりも資本主義批判という色彩が強いといえる[6]。

他方2009年に結党された「人間・動物・自然(PAN)」は、動物の権利擁護など、より急進的な主張を掲げ、2011年から国政選挙に参加した（同党HP)。その結果2015年には初めて1議席を獲得、さらに2019年の選挙では4議席へと勢力を拡大させている。

現状と展望

金融危機はスペインとポルトガルの左翼政党（さらに政党システム）のあり方を大きく変えた。とはいえポデモスやBEは依然として確固たる基盤を持たず、選挙ごとの変易性が高いため、左の空白を埋める存在として定着したとは断言できない。

ポルトガルでは2015年総選挙の後、コスタ率い

るPS少数派政権をPCP-PEV、BEが支持するという枠組が生まれた（2019年総選挙後も継続）。政党システムの抜本的な変容が起こらない中で、既存の中道左派政党と左翼政党との連携による政権運営が続いている。

スペインでは2015年総選挙の前後から政党システムの破片化が進み、二大政党（PSOE、PP）の得票率が大きく減少し、新興政党が躍進している。新興政党はいずれも旧来の左右軸には沿わない立場を打ち出し、また選挙ごとの浮沈が激しいため、二大政党と新興政党との連立交渉はしばしば困難に直面し、政治の不安定性が増大した（2015年以降、2019年11月まで計4回の総選挙が実施された）。

他方、ポルトガルにおいて投票率の低下が続いている点も興味深い[7]。政治が不安定化しながらも投票率は相対的に高いスペインとのコントラストは、左右軸の中での刷新が、人々を惹きつける政治的誘因として機能しなくなりつつあることを示唆しているようにも思われる。

そのような中、ポデモスはPSOEに対し「進歩派連立政権」の形成を呼びかけるようになった。2019年11月（同年2度目）の総選挙を経て、本年（2020年）1月にPSOEとポデモス、地域政党・カタルーニャ共和主義左翼（ERC）による、民主化後初の連立政権が誕生した。

こうして両国で左翼政党がキャスティングボートを握る形で政権に関与した意義は大きい。2015年総選挙で19議席を獲得したBEは、PS政権支持の条件として、年金凍結の廃止、労働市場の規制緩和停止などを示し、緊縮政策に対する一定の歯止め役を果たしている（Príncipe 2019: 82）。スペインではポデモスが「抵抗」から「統治」の党へ変容を遂げうるか、なお注視する必要がある。

現在両国の左翼政党は、経済再建や生活防衛を重視した政策（最低賃金の増加など）を掲げているが、より積極的かつ広範な政治的争点を構築できるかどうか。さらに、リベラル化した中道左派政党、および（成人男性・組織労働者の支持を前提とした）伝統的左翼政党の双方によって代表されない人々（若年・非正規労働者、女性、マイノリティなど）を動員・包摂することで、政治の刷新を果たせるかどうか。それとも「統治」の実績を持ち、近年やや勢力を回復させてきた中道左派政党の補完役にとどまるのか。イベリア両国の事例は、こうしたヨーロッパの左翼政党の可能性と限界を探る上で重要な試金石となろう。■

《注》

1 この点は、レジスタンス運動を主導した戦後のイタリアやフランスの共産党との状況も類似する。

2 ただしポデモスの「人民」概念は、他国の右派ポピュリズムが用いるような同質的・排外的なそれとは明確に異なる（Llaguno 2019: 162）。

3 2019年5月の総選挙で初めて議席を獲得したVOXも存在するが、移民排斥などの主張に鑑みれば、ポデモスとの競合は考えにくい。

4 例えば2003年に設立された「動物虐待に反対する動物愛護者の党（PACMA）」は、2015年以降の総選挙での得票率が1%前後で推移し、現時点で議席の獲得には至っていない。

5 マス・パイスは獣医費にかかる税率の削減や闘牛への補助廃止を掲げている（同党HP）。

6 同党は、外側は緑だが中身は赤という意味で「スイカ」というニックネームを持つ。

7 2011年総選挙の投票率は58.0%、2015年は56.1%、さらに2019年には48.5%にまで落ち込んだ。

《参考文献》

欧語文献

Castaño, Pablo (coord.) (2019) *De las calles a las urnas: Nuevos partidos de izquierda en la Europa de la austeridad*, Akal.

Chiocchetti, Paolo (2017) *The Radical Left Party Family in Western Europe, 1989-2015,* Routledge.

Freire, André (2016) 'The condition of Portuguese democracy during the Troika's intervention, 2011-15' *Portuguese Journal of Social Science,* vol.15, no.2, pp.173-193.

Freire, André and Marco Lisi (2016) 'Political parties, citizens and the economic crisis: The evolution of Southern European democracies' *Portuguese Journal of Social Science*, vol.15, no.2, pp.153-171.

Hudson, Kate (2012) *The New European Left: A Socialism for the Twenty-First Century?,* Palgrave Macmillan.

Llaguno, Tatiana (2019) 'Entre la irrupción y la institución: el caso de Podemos' in Castaño,

Pablo (coord.) (2019) *De las calles a las urnas: Nuevos partidos de izquierda en la Europa de la austeridad,* Akal.

March Luke (2012) *Radical Left Parties in Europe,* Routledge.

Medina, Lucía (2016) 'Crisis, changes and uncertainty: Spanish party system after the Great Recession', *Portuguese Journal of Social Science,* vol.15, no.2, pp.237-254.

Príncipe, Catarina (2019) 'El Bloque de Izquierda portugués, ¿empezar de nuevo?' in Castaño, Pablo (coord.) (2019) *De las calles a las urnas: Nuevos partidos de izquierda en la Europa de la austeridad,* Akal.

Ramiro, Luis (2000) 'Entre coalición y partido: la evolución del modelo organizativo de Izquierda Unida', *Revista Española de Ciencia Política,* vol.1, núm.2, pp.237-268.

Ramiro, Luis and Raul Gomez (2017) 'Radical-Left Populism during the Great Recession: *Podemos* and Its Competition with the Established Radical Left', *Political Studies*, vol.65, pp.108-126.

邦語文献

中島晶子（2016）「左翼ポピュリズムという幻影：ギリシアの急進左派連合とスペインのポデモスから」『年報政治学 2016- II 政党研究のフロンティア』144-162 ページ。

野上和裕（2015）「ポデモス擡頭のスペイン政治における意味」『法学会雑誌（首都大学東京）』第 56 巻第 1 号、193-227 ページ。

水島治郎（2016）『ポピュリズムとは何か』中央公論新社。

政党公式ホームページ

PAN: https://pan.com.pt/（最終アクセス日 2020 年 2 月 8 日）

マス・パイス：https://maspais.es/（最終アクセス日 2020 年 2 月 8 日）

緑の党（PEV）：http://www.osverdes.pt/（最終アクセス日 2020 年 2 月 8 日）